

## (2) 各学系の研究

---

### ① 学校教育学系

#### ア 研究の特色

学校教育学系は教育学，教育実践研究を中核としており，教員養成大学としての本学の教育・研究の根幹をなす研究領域を幅広く担っている。全学的な教職必修科目を担当する教員も多く，また教員免許状更新講習においても，必修・選択必修領域の講習の多くの部分を本学系教員が担当するなど，学内においても地域貢献においても，大人数を対象とした講義・講演を担当する機会が多いことは，本学系の大きな特色である。加えて，国・地方自治体，地域社会，学校等に至る，全国の教員研修や講演会の講師も数多く手がけており，学術研究にとどまらず，広く学校現場に開かれた実践的・臨床的な視点を携えながら，研究活動に取り組んでいる。専門職学位課程の教員は，「学校支援フィールドワーク」を中心として，学部生・大学院生の指導のみならず地域の学校の支援に大きく貢献しており，また全国の研究会講師や実践研究の取組をリードしている。

#### イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系は，修士課程と専門職学位課程の教員による，多方面での教育・研究，学会における研究発表と論文の投稿，著書の刊行，学外においては，国・地方自治体，地域社会，学校等に至る各種の研修会・講演会の講師や公開講座，出前講座の講師等で成果を上げている。

そうした中で，本年度は次の4件の学内研究プロジェクトが新規に実施された。

- ・空間概念を育成するプログラミング教育の開発と評価 ～小学校1年から6年までの教科横断型授業実践を通して～（特別研究）
- ・学び続ける力の育成を目指した継続的な省察を支援する授業観察（若手研究）
- ・国際学力調査に見る認知的能力と社会情緒的コンピテンスの関係（若手研究）
- ・ICTを活用し，批判的思考を育成する指導法の開発と教員養成への活用（若手研究）

## ② 臨床・健康教育学系

### ア 研究の特色

本学系では、臨床心理学に基づいたいじめ、不登校、ひきこもり、発達障害、児童虐待、PTSDなどのこころの問題の解決に向けた研究、特別支援教育の基礎理論、各種障害（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱、情緒障害、言語障害、重複障害、発達障害）の心理・生理学、診断法、指導法に関する研究、学校健康教育学、医科学、養護学等に基づいた学校における健康教育に関する研究が行われている。心理教育相談室、特別支援教育実践研究センターをはじめとする臨床研究の場において、いずれのコース・科目群も学校における喫緊の課題に対応するための臨床的、実践的研究を展開している。

### イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系では、心理教育相談室、特別支援教育実践研究センター及び地域の学校等において多様な臨床研究が展開されており、これらの成果は、関連学会や大学紀要の他、『上越教育大学心理教育相談研究』や『上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要』においても公表されている。また、学校及び地域社会を含めた健康教育（学校安全、学校保健）や健康課題への対応に関する研究も盛んに行われている。

このような研究活動の一環として、今年度は次の1件の学内研究プロジェクトが実施された。

- ・特別な支援が必要な児童生徒への合理的配慮の提供に関する学校のチーム力を高めるための研究・研修の内容と方法について

このように、本学系の構成員は、それぞれの領域の専門性を活かして、学内のみならず地域においても活発に研究活動を継続している。臨床心理学コースにおける公認心理師及び臨床心理士の資格取得に向けた対応や、特別支援教育コースにおける6年一貫プログラムの策定・実施、学校ヘルスケア科目群における保健管理センターとの連携強化など、本学系の特色を活かした教育・研究活動の更なる発展が期待されており、それらの実現に向けた体制充実が重要である。

### ③ 人文・社会教育学系

#### ア 研究の特色

人文・社会教育学系に属する主な研究領域は、国語学、国文学、国語科教育、書写書道、英語学、英語科教育、小学校英語教育、異文化コミュニケーション、歴史学、地理学、地誌学、法律学、経済学、社会学、宗教学、社会科教育、と多岐にわたっている。

こうした研究領域における研究活動を推進するため、本学系の教員と多数の卒業生、修了生が所属する「上越教育大学国語教育学会」、「上越英語教育学会」、「上越教育大学社会科教育学会」の3学会が組織・運営されており、活発な活動がなされている。

#### イ 優れた点及び今後の検討課題等

人文・社会教育学系に属する主な研究領域は、国語学、国文学、国語科教育、書写書道、英語学、英語科教育、小学校英語教育、異文化コミュニケーション、歴史学、地理学、地誌学、法律学、経済学、社会学、宗教学、社会科教育、と多岐にわたっている。

こうした研究領域における研究活動を推進するため、本学系の教員と多数の卒業生、修了生が所属する「上越教育大学国語教育学会」、「上越英語教育学会」、「上越教育大学社会科教育学会」の3学会が組織・運営されており、活発な活動がなされている。

#### ④ 自然・生活教育学系

##### ア 研究の特色

自然・生活教育学系は、数学、理科、技術、家庭科の4つの専門分野の教員によって構成されている。数学の分野では、7月21日に「数学教室修士会」と称して数学並びに数学教育の講演会を開催し、数学教室教員ならびに大学院学生の研修を行った。また、「上越数学教育研究」34号を刊行し、教員ならびに大学院修了院生等の研究論文を掲載した。継続して算数・数学の授業に直結した教育研究を行っている。29年度～30年度学内研究プロジェクトに、中学校の文字式の学習と図形の証明学習とで形成される子どものアイデンティティと認知的学力の様態（代表 高橋 等）、グローバル教員育成のためのプロジェクト型国際交流プログラムにおける学生の学び（代表 宮川健）が採択された。

理科の分野では、化石、プラズマ、星間物質、動物、半導体、無機・分析化学、植物を対象に各教員が自分の専門領域の研究を行うとともに、その成果をもとに物理、化学、生物、地学の分野における教材開発や素材の研究を行うなど各教員の専門性を背景とした教育の研究を行った。今年着任した2名の理科教育学の教員は、科学概念、問題解決、カリキュラム開発を専門とし、学校現場に直結したより実践的な研究を行った。各教員は科学研究費補助金の代表者あるいは分担者となり、自分の専門性を高める研究を行うとともに、上越地域の小中学校の理科の教師が主催する上越物理・化学同好会や上越科学技術教育研究会のメンバーとなり、会が主催する発表会の講師になるなど地域の理科教育の発展に努めた。なお、地域の理科教育の発展を目的に平成16年からはじめた理科野外観察指導員認定制度は、平成30年度をもって終了した。

技術の分野では、メカトロニクス教材の開発を中心としたエネルギー変換技術の研究や、情報ネットワークやICTに関する技術、特に、学外活動として、上越市内および糸魚川市内において小・中学生を対象にプログラミングの学習指導・実践も行っており、学校現場の課題に対応した取組も積極的に行っている。また、木材加工や加工材料に関する専門的研究を行うとともに、全員が専門性を背景とした教材研究を行っている。教科教育研究では技術教育課程開発や技術教材の機能に関する研究を中心に技術科教育の現代的課題を見据えた教育研究を行っている。平成30年度から31年度学内研究プロジェクトに、学習の基盤となる資質・能力である「プログラミング的思考」を生かしたカリキュラムと題材開発（代表 大森康正）が採択された。この研究プロジェクトは、新潟県立教育センター、長岡市内および柏崎市内の小中学校4校との共同研究として実践を中心とした研究を行っている。その成果については学会等で発表すると同時に、新潟県立教育センター主催の第12回教育フォーラムにおける分科会で研究発表および演習が行われ、地域の教員等に対して成果の還元が行われた。平成30年度は、信州大学で開催された日本産業技術教育学会全国大会の実行委員として参画し、研究発表のプログラム編成を行うなど、全国大会運営に直接携わった。

家庭科の分野では、学校教育実践研究センター主催の本学創立40周年記念企画「昭和から平成の教育展」において、記念講演（題目：「発酵のまち上越」の食文化）を実施した。平成29～30年度本学研究プロジェクトとしては、「科学的素養の育成を視座とした家庭科授業実践に関する研究」、「特別な配慮を必要とする子供たちに着目した学校改善に関する研修の研究」があり、講義、公開研修会、講演会などを行った。地域貢献としては、次の3つの活動を行った。「地域素材を授業にいかすためのワークショップ」のテーマのもと、「みんなで考える幸せに生きるための住生活カリキュラム」と題し、兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科澤田雅浩准教授による特別講義『〈みんなでつくる防災教育体制〉をコーディネートして』を実施し、防災教育に求められること、地域資源の活用学校と地域の協働等に

ついて、皆で考える機会とした。教室で外国につながる子どもやALTに出会ったら、教師としてどうかかわるのかを考える扉を開ける場となること企図して、「教育の国際化 — 文化的背景の違う子どもをどう理解するか —」と題して、箕浦康子名誉教授（お茶の水女子大学）、浅井亜紀子教授（桜美林大学）による講演会を開催した。有志の学生が新潟県の「大学生の力を活かした集落活性化事業」に参加し、過疎高齢化の集落の伝統行事を主題に、地域の人々と協働して賑わいを取り戻す活動を行った。

#### イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系に所属する教員の研究業績の中には、毎年、国際誌へ採録された論文が多数あり、国際的に活躍している研究者が複数いることは本学系の特筆すべきことである。学術研究の成果を発信し続けられる研究環境をいかに創出していくかが今後の大きな課題である。

## ⑤ 芸術・体育教育学系

### ア 研究の特色

芸術・体育教育学系に所属する教員の主な研究領域は、声楽、器楽、作曲、音楽学、音楽科教育、絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術理論・美術史、美術科教育、体育学、運動学、学校保健、体育科教育といった音楽、美術、保健体育の教科に関連した基礎的及び応用的な研究領域からなる。また、これらの領域は実技指導や作品・演奏発表に関しても地域社会と密接に関わり、近隣の学校や地域において音楽や美術、スポーツの普及・発展に尽力するとともに、コンクールや競技会において審査員や競技審判等を委嘱される機会も多い。平成30年度も本学系では各教員の専門を生かした地域貢献活動が活発に進められたほか、教科や領域を超えた学際的な教育、研究が進められた。また、美術では国際プロジェクト研究も推進した。

### イ 優れた点及び今後の検討課題等

本年度に実施した上越教育大学研究プロジェクトとしては、「脱水に関連するコンディショニングの教材化に関する研究」(池川茂樹)、「教科教育カリキュラム構想のための基礎的・実践的研究—「21世紀を生き抜くための能力」を育成する教科指導法の観点から—」(研究代表者：阿部靖子、研究分担者：時得紀子、尾崎祐司、五十嵐史帆、土田了輔、周東和好)、「健康管理に特別な配慮を必要とする子どもの学級担任を支援するための「地域連携コモンズ」形成の試み」(H30～31年度／研究代表者：大庭重治、研究分担者、池川茂樹、他)などがあった。また、産学共同研究として「5-ALA摂取と持久性トレーニングの併用が若年者の好気呼吸能に及ぼす影響」(池川茂樹、SBIファーマ株式会社との共同研究)を行った。

さらに、科学研究費採択については、「教員養成系大学の「知」を活用した美術館連携モデルの実践的研究」(研究代表者：五十嵐史帆)、「子どもの直観像に関する発達認知神経科学的研究」挑戦的研究(萌芽)(平成29～30年度)(研究代表者 森口佑介(京都大学)、研究分担者 安部泰)、「伝統音楽の教授法・学習法とその変化～明治・大正期能楽を中心として」(若手研究(B)、研究代表者、玉村恭)、「能楽及び能楽研究の国際的定位置と新たな参照標準確立のための基盤研究」(基盤研究(B)、研究分担者、玉村恭)に交付がなされた。

その他に、保健体育分野の特筆すべき研究成果として周東和好教授は、掲載論文が評価されて日本体育学会浅田学術奨励賞と救急法のボランティア活動に対する貢献が評価されて日本赤十字社群馬県支部から特別感謝状を授与され、池川茂樹准教授は国際誌Journal of Physiologyに論文が掲載された。

このように学系所属の教員により活発に研究が進められた。